

一茶の書簡について

小林 計一郎

1. はじめに

書簡はその人の人柄や思想や生活をかなり赤裸々に示すことが多い。文学者の場合は、その表芸ともいべき作品の裏にある、その作者の人間としての一面をよく示す場合がある。俳人一茶の場合も同様で、彼の人柄や門人に対する態度や生活等々が、その書簡からかなりよくうかがわれる。一茶の書簡の収集は、芭蕉や蕪村に比べてかなりおくれ、またその考証もあまり正確でなかったため、いままで書簡についての研究はあまりなされず、また、書簡を伝記資料や彼の文学の考察の材料として使用することもあまりされなかった。しかし、昭和45年3月、『古典俳文学大系・一茶編』が刊行され、その「書簡編」(筆者編)に一茶の書簡はいちおう集大成され、考証もほぼ正確に近くなされたと考えるので、これを機に、一茶の書簡について考察してみたい。

2. 一茶の書簡の残りかた

『古典俳文学大系』(集英社版)によると、現在知られている書簡は、芭蕉179通(ほかに真偽未詳8)、蕪村357通、一茶107通である。現在知られている俳句の句数は、芭蕉約1000句、蕪村約3000句、一茶約20000句である。芭蕉・蕪村に比べて遺作のはるかに多い一茶に、書簡の知られるものが割に少ないのは、一茶が在世時はもちろん、死後かなりの間、芭蕉や蕪村ほど世に知られなかったからであろう。表は芭蕉・蕪村・一茶の三人の書簡のうち、年代のわかっているものを、年齢別に数えたものである。これによると、芭蕉も蕪村も、若い時のものはきわめて少ない。芭蕉の書簡で世に知られている最初のもは、延宝9年(38歳)のものであり、蕪村の場合も、宝暦14年(49歳)以前のもは、わずか3通しか知られていない。それらと比べると、一茶のものは、比較的若い時のものが多く残っている(それに反比例して晩年のものが少ない)といえるだろう。そこで一茶の書簡の「残り方」について、簡単に説明することにしよう。(書簡番号は「古典俳文学大系」による。芭蕉・蕪村についても同じ)

	年齢別の書簡数		
	芭蕉	蕪村	一茶
20歳代	0	0	0
30〃	1	1	13
40〃	116	2	11
50〃	58	50	51
60〃	—	185	20
不明	4	119	12
計	179	357	107
備考	没年芭蕉51, 蕪村68, 一茶65		

(1) 戸谷家の書簡 一茶は西国行脚の記念として、「さらば笠」を刊行し、それに書簡を

添えて知人に送ったが、江戸方面の知人に宛てた分を、中山道本庄宿の富商中屋半兵衛（俳名双鳥）気付として送り、双鳥の手で届けてもらうよう依頼した。しかし双鳥は何かの事情で一茶の依頼を果さず、自分宛の書簡や「さらば笠」も開封せず、そのまましまい込んでしまった。それで11通が戸谷家（現当主本庄市戸谷半之助氏）方に（うち1通は番頭の家）に残ったのである。これはむしろ「無視されて残った」ものである。（書簡2～11および101）

(2) 「俳諧寺一茶翁文通」これは、下総馬橋（松戸市馬橋）の門人大川斗圍が、一茶の書簡を書留めておいたもので、一茶の書簡としてもっとも古い寛政9年（35歳）の元夢宛のものを含めて11通の書簡を収めている。（勝峯晋風『新選一茶全集』所収）

(3) 以上のほかは一茶の門人の子孫の家などに所蔵されているものや、転売により各地に分散しているものなどである。宛名別にすると、上原文路・西原文虎・佐藤魚淵宛各8通、久保田春耕宛6通、村松春甫宛4通などの順だが、久保田家以外はすべて子孫の家には1通もなく、全部流出している。

(4) 一茶の書簡には全くの偽簡と思われるものはないが、真蹟からの透き写しと思われるものが真蹟としてかなり出まわっている。「古典俳文学大系」所収の67, 75, 88は、いずれも同文の書簡が2通ずつ現存している。37, 46, 76なども、現物又は写真を見たところでは原簡とは思われない。しかし後人の創作と思われるものは一つも現存しないから、書簡の考察にはあまり差支えはない。

3. 書簡を通じての門人指導

業俳（職業俳人）の書簡は、その大部分が門人に宛てたものである。これは芭蕉も蕪村も一茶もほとんど同じで、若いころの書簡がほとんど残っておらず、大部分がそれぞれの社中を形成し、門人にとりまかれてから後の書簡である。門人たちは、師匠の書簡だからこそ、それを大切に保存しておいたわけで、現存する書簡の大部分が門人あてのものであるのは当然である。一茶の書簡は、江戸・葛飾方面の人へ宛てたもの30通、信州の人に宛てたもの71通、その他6通だが、そのうち、「さらば笠」の送り状11通と、先輩・同輩の俳人にあてた10通（1, 26, 31, 42, 58, 68, 72, 88, 90, 103）、妻菊および医師宛の各2通を除くほかは全部門人またはそれに準ずる人に宛てたものである。

門人に宛てた手紙は何等かの意味で指導に関係していると考えてよい。その指導に次の三つの場合が考えられる。

- (1) 書簡のなかで、自己の主張、俳論や指導理念を述べている場合。
- (2) 書簡のなかで、直接門人の句の添削指導等を行なっている場合。
- (3) 書簡に自分の句や俳文を書き添えただけの場合。この場合でも門人に模範を示すという意味があるから、やはり一種の指導とってよからう。

さて、(1)の点では芭蕉・蕪村と一茶との間には、かなり大きな隔りがある。芭蕉には、私の数えたところでは、俳論・指導理念等を含む書簡が24通あるが、一茶にはそれがたった1通しかない。文政2年2月15日付、李園宛の書簡（52）で、そのなかで、歌仙における恋の句の作り方について、かなりくわしく説明している。「恋を示すことばがなくとも、佛（おもかげ）に恋を持たせるのが蕉風のはからいである」という意味のことを主張し、いくつかの例をあげている。この書簡は一茶の書簡のうち最長のものだが、そのほかは、俳諧の理念

に基いて指導している例がほとんどない。芭蕉は門人の指導にはなかなかきびしく、また自分の理念で門人を強く指導しようとした。蕪村は書簡のなかで俳論を述べることはあまりなかったが、几董などに対しては実に懇切な指導をしている。(蕪村書簡11. 27. 31等。)一茶は自己の理念で門人をリードしようとした形跡は、書簡の上ではほとんど見られない。一茶はその特異な句風、いわゆる「一茶調」を門人にすすめなかったのはもちろん、「一茶調」を安易に模倣することを戒めている場合が多いが(火耀40年11号、拙稿「一茶の俳諧観—その門人指導を通して」)、書簡の上でも「一茶調」で門人をリードしようとせぬことはもちろん、ある目標に門人を導こうという姿勢はあまり見られない。

(2)の点について見ると「玉吟いづれもおもしろく、その中に〇めくじり立る花 〇なの花 〇放亀等、別して甘心仕候」(春甫宛, 18), 「さて玉吟, 明行や……等, 別しておかしく奉存候」(文虎宛, 23), 「さて何事もなき子声, 甘心仕候」(文虎宛, 63)等、軽くほめておくという程度のものが数通(17, 51等)あるだけである。18は、一茶の句控「随齋筆紀」には、ここにあげた3句のうち、「散花にめくじり立る端居哉」の一句しか控えてなく、一茶自身、さほど感心したわけではないらしい。多少批判めいたことばは、「御句、梅がかの鶏、木に鷺の次よみかね、さもさんは甘心不仕候」(文路宛, 55)というのがただ一つの例である。もっともほめるのは一茶に限らず、芭蕉もずいぶんほめており、初心者指導の定石であるが、一茶の場合は、きびしい指導というものが、少なくとも書簡には全然見られない。具体的な添削は、斗圃宛の「57」(文政3), 「59」(同年), 文路宛の「67」(文政4)の3通が知られるだけである。「57」には「みそ萩はそら小便と一直いか候哉」, 「59」には「目に見ゆる秋は、ちと一句落着せずやありけん」として、「目に見ゆる秋とはなりぬはたて雲」となおしたのをはじめ、一茶が手を入れた4句を並べ、「……など一直づつ仕候。御意いかがあらん」と結んでいる。ただしもとの句はわからない。「67」には、「さて透通るは御寺哉などあらばいかがならん」と具体的な添削がある。一茶が門人の句稿に手を入れた例はいくつもあるが、書簡では以上の3例しかない。大川斗圃、上原文路は特に親しい門人であった。

(3)書簡に発句を書き添える傾向は、一茶の場合、特に顕著である。芭蕉の書簡のうち、内容が雑事にわたって俳諧と関係のないもの36通を除いた143通のうち、句を記したものは55通で約40%にすぎない。それも多くは一句で、一番多い場合でも6句であり、これは稀な例である。(44, 万菊丸宛)。芭蕉の書簡で一番長いもの(元禄5, 去来宛, 104)は4メートルあまりの長さだというが、句は一句も記されていない。蕪村の場合もそれに近く、例えば几董に宛てた70通の書簡のうち、句を記したものは31通で、44%である。几董に対する親切な指導や添削はきわめて多いが、自分の句を模範として記すことは意外に少ない。一茶の場合は芭蕉・蕪村と大いに異なっている。雑事に関するもの、断簡で首尾完全でないもの等10通を除くと、一茶の書簡で自句を記してないのは8通しかない。(39, 58, 76, 91, 92, 97, 98, 100等)。つまり、約90%の書簡に句が記してあり、句の数も、18句(59, 斗圃宛), 13句(62, 同)等、かなり多いものがある。もっともこれは一茶個人だけの問題ではなく、一茶の時代には俳人の書簡には自作の句を書き添えるのが常識となっていたという事情がある。一茶宛の書簡15通のうち、句を記してあるのは12通(80%)、一茶とはほぼ同時代の信州佐久の俳人市川祇因(享保12—文化4)宛の書簡17通(雑誌「長野」50号、矢羽勝幸「祇

因宛の俳人書簡)のうち、句を記したものの13通(77%)と、ほぼ一茶と同じような傾向を示すが、一茶の場合は、例外を除いて必ず自作の句を付記する例であり、芭蕉や蕪村と比べて一茶のほうが、平易に、軽い気持ちで句を発表していると考えざるを得ない。それだけ発表欲が旺盛であったとも言えるし、芭蕉・蕪村ほどに慎重ではなかったとも言えるだろう。

4. 一茶の書簡の特色

一茶は俳句(発句)だけでなく、文章においても並々ならぬ才能を有していた。例えば、「父の終焉日記」などは、けっして単なる日記ではなく、かなり多くのフィクションが含まれてはいるが、全体としてよく統一がとれ、小説的な山さえあり、文章もみごとである。書簡においても、一茶のすぐれた文才がよく示されている。一茶の句には滑稽、諧謔の趣のあるものが多く、正岡子規は「一茶の特色は主として滑稽、諷刺、慈愛の三点にあり」(明治30年刊正岡子規校閲「俳人一茶」付録)と評している。一茶の俳文には、さほど「滑稽」という特色は目立っていないが、書簡には、いかにも一茶らしい機知やユーモアに富んだものが多い。一茶は文政3年10月16日、中風にかかり、一時、半身不随、言語も不自由になった。間もなく快方には向ったが、一茶は当時、門人のための俳書を3冊ほど編纂中であり、それを出版せずに倒れるのは、いかにも無念であったらしい。中風にかかって約一カ月後の11月11日に江戸の俳人卓池に送った書簡(58)には、次のように述べている。「さて、私も十月十七日、途中にて迂り転ぶを相図に中風起り、最早(いちはやく)道駕籠にて庵に乗込候。すはや成美の跡追ふて彼国一見かと思ひけるに、手合の薬にて、口曲りも半身不随も癒候。

(中略)若又、このままにころりとしたらば、御方角を迷ひ歩かんと被存候。其訳は文路が『おらが世』、春耕が『葦草』、素鏡が『種おろし』、此三部の外にも、さまざま江戸に参りて編むべく思ひ候間、其集との半途果たらば、執心必ふはりふはりとして、一番に品川へも出かけ申べく、其時わっとかけ出し被成ず、幽霊太鼓のどろどろでも鳴らして御用心可被下候。卓池は三河の人だが、当時江戸品川に住んでいた。上原文路・久保田春耕・住田素鏡は一茶に親近した門人で、この三部のうち「種おろし」だけは文政8年に出版されたが、他の二部はついに出版されなかった。中風という業病にかかり、念願の出版がかないそうもない無念さを、諧謔に托してさらりと書き流し、おかしみがあってしかもまじめなところ、いかにも俳人の書簡としてふさわしい。同じ内容の同年12年8日付の呂芳宛の書簡(106)には「私は地獄の入口迄参り申候に、ゑんまいはく『汝、集板皆々仕廻て又来るべし。早々』とあれば、明た口へ餅とうれしく、此世に帰り候」と述べている。簡単ながらよく要を得、しかもウィットに富む文章である。

また、江戸の某(守静か)に江戸から故郷に帰着したことを報じた書簡(58、文化14、7、14)に、「長々留守中、北国すじの文通、扇面など、少々たまりて、さいそく状五六本づつ有之候へども」云々と書いているのも、ふざげ半分自慢半分のたくみなユーモアであり、ヒゼンという腫物が出来て旅先で困っていることを長沼の魚淵に報じた書簡(39、文化14、1、6)に「あまり新句吐くゆへ、和歌三神の天窓(あたま)敲き給ふにや、十一月初つかたより、ひぜんといふ腫物、総身にでき申候得ば、気づかひなる所にはちと延慮、吉田町二十四文でもなめたかと思はれんと推察候得ば、下総西林寺といふ山寺五十日あまり籠り申候」と述べているのも読者を失笑させずにはおかない機知である。旅先で大変な困難に出合っ

る歎きを述べながら、それをユーモアでつつみ、しかも自分の新風に対する自賛まで盛りこんだこの文章は、凡手のよくするところではない。

一茶の書簡のうち名文として有名なものに「ひぜん状」がある。これは前記のひぜんにつき、文化14年3月3日付で留守を守る若妻菊へ送った書簡(41)である。前半にはひぜんのため自由に行動ができず帰郷がおくれていることを説明し（この部分にはちょっとしたうそも書いてあって、いかにも作家らしいが）後半には「長々の留守、さぞさぞ退屈ならんと察し候へども、病には勝れず候。その方には、うす着になりて風でも引かぬやうに心がけ、何はたらかずともよろしく候間、十四日、十七日の茶日ばかり忘れぬやうに頼入候」とやさしい心づかいを見せ、また旅に病んでも祖母・母等の命日を忘れぬ信仰心の深さを見せている。これにつづけて「旧冬より此方は雪ちらちらしたる事も有之候へども、一寸ともつる事なく、埃ばつばとかんかん道なれば、自由自在に馳歩んと思ひけるに、ひぜんに引とどめられた一茶が心、御推察可被下候」と書いている。いかにも自由闊達の文で、円熟した筆というべきであろう。なお、一茶の文章中、代表的な名文といわれる「俳諧寺記」は文政3年12月8日、長沼の春甫ら4人に対する書簡(61)に付記されたものである。

5. ま と め

一茶の書簡は芭蕉や蕪村と比べて残っている数が少ない。これは一茶が生前はもちろん、死後かなりの間、芭蕉・蕪村ほど重んぜられなかったからであろう。（書簡そのものの絶対数が少なかったわけでは決してない。一茶はきわめて筆まめで、ひじょうにたくさんの書簡を書いている。）書簡を通して門人を指導しようとする気持ちは、一茶にはあまり強くなかった。しっかりした指導理念をもって門人を強く指導していくという点では一茶は芭蕉や蕪村にはるかに及ばなかった。その反面、書簡に自分の句を書く例は一茶の方がはるかに多く、一茶が発表欲が旺盛で、句の発表が芭蕉・蕪村ほど慎重でなかったことが察せられる。一茶の文才は書簡にも充分に発揮されており、ことに滑稽・諧謔のすぐれた表現が多い。病苦の歎き等をさらりと書き流すみごとさは、いかにも俳諧師の筆にふさわしい。要するに一茶の書簡は、長所も短所も含めて、一茶の文学や性格の特色をよく示しているというべきであろう。